千葉県教育振興財団調査報告第715集

横芝光町 栗山川流域遺跡群・宝米遺跡

両総農業水利事業

― 栗山川統合機場等建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

平成25年3月

両　総　農　業　水　利　事　業　所

公益財団法人　千葉県教育振興財団

横芝光町 栗山川流域遺跡群・宝米遺跡

よこしばひかりまち　くりやまがわりゅういきいせきぐん　ほうめいせき

両総農業水利事業

― 栗山川統合機場等建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第715集として、両総農業水利事業の栗山川統合機場等建設工事に伴って実施した横芝光町栗山川流域遺跡群・宝米遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、低地部からは縄文土器や木杭、台地上の立川ローム層最下層からは旧石器時代の石器が出土するなど、この地域の歴史を知る上で多くの貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理　事　長　　渡　邉　清　秋

凡　　例

1　本書は、関東農政局両総農業水利事業所による両総農業水利事業栗山川統合機場等建設工事に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　栗山川流域遺跡群　山武郡横芝光町新井字六反町 887 番地ほか（遺跡コード 410-001）

　宝米遺跡　　山武郡横芝光町新井字申畑 945 番地ほか　（遺跡コード 410-002）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、関東農政局両総農業水利事業所の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は下記の通りである。

平成 21 年度　調査研究部長　及川淳一　北部調査事務所長　野口行雄

　発掘調査　栗山川流域遺跡群　平成 21 年 10 月 1 日～ 11 月 30 日　主席研究員　石倉亮治

　　宝米遺跡　　平成 22 年 2 月 1 日～ 2 月 22 日　上席研究員　内山　健

　整理作業　栗山川流域遺跡群　平成 22 年 1 月 4 日～ 1 月 29 日　副　所　長　相京邦彦

平成 24 年度　調査研究部長　関口達彦　整理課長　高田 博　調査２課長　橋本勝雄

　整理作業　栗山川流域遺跡群・宝米遺跡

　　平成 25 年 1 月 4 日～ 2 月 15 日　主任上席文化財主事　香取正彦

　　上 席 文 化 財 主 事　黒沢　崇

5　本書の執筆は上席文化財主事　黒沢 崇が行った。なお、宝米遺跡出土旧石器については調査２課長橋本勝雄の協力を得た。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育振興部文化財課、横芝光町教育委員会、両総農業水利事業所ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は下記の通りである。

　第１図　国土地理院発行　1/25,000　地形図「多古」平成 22 年

　第２図　地図史料編纂会編　関東平野地誌図集成「八日市場村・柴山村」 明治前期

　第３図　光町都市計画図　1/2,500 「２・４・５」 平成 13 年修正

8　本書で使用した地図の座標値は、第３・９図が日本測地系、第４図が世界測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

9　図版１の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和 42 年撮影のものである。

本文目次

序　文
凡　例
目　次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　事業の経緯と経過…… 1
　　２　調査の方法…… 1
　第２節　遺跡の位置と周辺遺跡…… 1
第２章　栗山川流域遺跡群…… 5
　第１節　トレンチ…… 5
　第２節　出土遺物…… 5
第３章　宝米遺跡……11
　第１節　旧石器時代……11
　第２節　縄文時代以降……11
第４章　まとめ……14
抄　録……巻末

挿図目次

第１図　栗山川流域遺跡群・宝米遺跡と周辺遺跡…… 2
第２図　迅速測図による周辺地形と丸木舟出土地…… 3
第３図　周辺地形と調査対象区…… 4

栗山川流域遺跡群

第４図　トレンチ配置図と土層柱状図…… 6
第５図　主なトレンチ断面図…… 7
第６図　24 トレンチ遺物出土状況・断面図 …… 8
第７図　遺物実測図（１）…… 9
第８図　遺物実測図（２）……10

宝米遺跡

第９図　トレンチ・グリッド配置図……12
第10図　旧石器出土状況・実測図……13

表目次

栗山川流域遺跡群

第１表　確認トレンチ一覧表…… 8

宝米遺跡

第２表　旧石器時代石器観察表……13

図版目次

図版１　航空写真（１/10,000）

栗山川流域遺跡群

図版２　調査区遠景
図版３　トレンチ土層状況（１）
図版４　トレンチ土層状況（２）
図版５　トレンチ土層状況（３）・遺物出土状況
図版６　出土遺物（１）
図版７　出土遺物（２）

宝米遺跡

図版８　遺構・石器出土状況
図版９　出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　事業の経緯と経過

横芝光町新井において栗山川中流域に所在する取水口を１か所に統合し、維持管理の合理化を目的に栗山川統合機場建設が計画され、両総農業水利事業所より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査を行い、事業地内に遺跡が所在する旨を回答した。この回答を受け､その取り扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。調査については公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センターが実施することとなった。そして、平成 21 年度に栗山川流域遺跡群・宝米遺跡の発掘調査及び栗山川流域遺跡群の整理作業を行い、平成 24 年度に残りの整理作業を実施した。

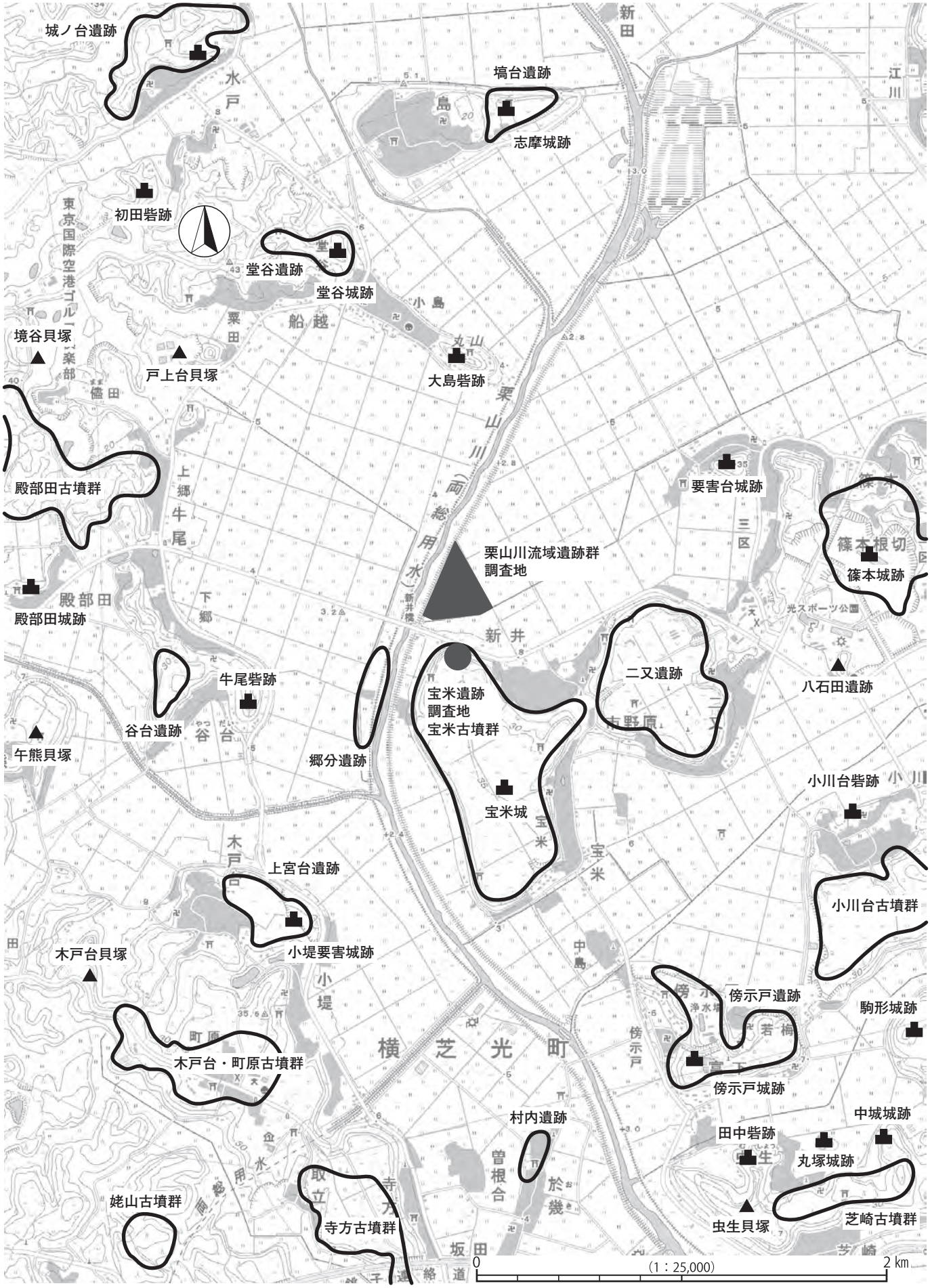
２　調査の方法

発掘調査　栗山川流域遺跡群では、調査にあたり調査区全体を覆う 50 m × 50 mの方眼網を大グリッドとし、名称は起点から南方向に１、２･･･、東方向に A、B･･･ とした（第４図)。大グリッドを５m四方に 100 分割し、北西隅を 00、南東隅を 99 として小グリッドとした。上層確認調査は確認トレンチを設定して実施したが、遺構は確認できず、遺物の集中出土もみられなかったため本調査は実施しなかった。なお、低地遺跡のため下層（旧石器時代）確認調査は実施していない。宝米遺跡では記録についてグリッド法は採用していない。上層確認調査では部分的に検出された遺構について確認トレンチを拡張して精査した。しかし、時期の特定ができず、周辺に遺構の広がりもみられなかったため確認調査の範囲内で終了とした。その後、下層確認調査を行い、旧石器出土地点を中心に本調査を実施した。

整理作業　出土遺物の水洗と注記作業を行った後、遺物を種別分類してから、接合作業等を行った。遺物の実測はすべて手実測、縄文土器は拓本を実施した。また、調査図面・写真の記録整理を進め、トレース・挿図・写真図版については原図類をスキャニングし、デジタル化してから作成した。その作業と併行して原稿執筆を行い、編集・校正作業を経て、報告書印刷・刊行となった。

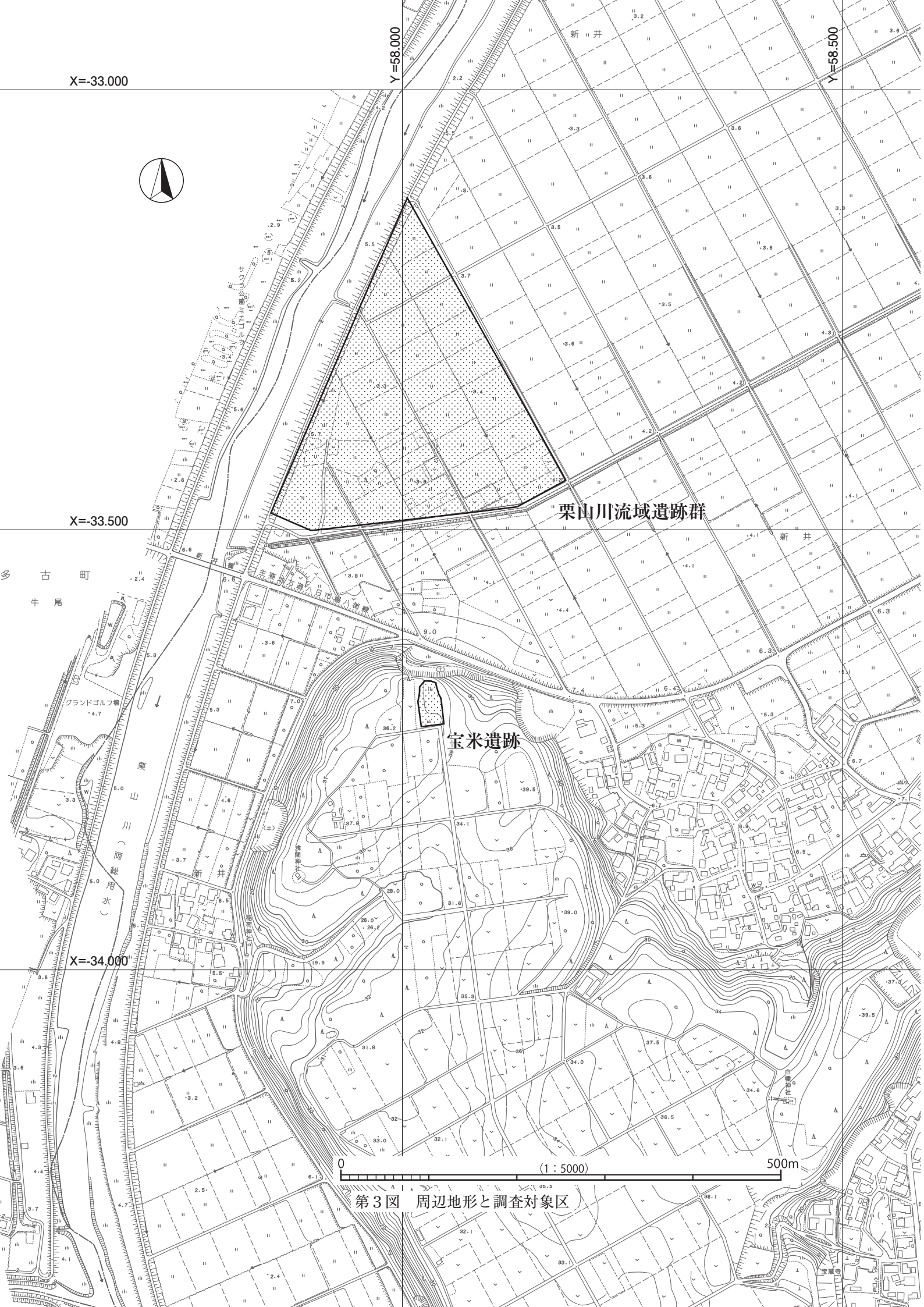
第２節　遺跡の位置と周辺遺跡[1)]（第１～３図、図版１）

栗山川流域遺跡群と宝米遺跡は横芝光町新井の緩く曲がりながら南流する栗山川の東岸に位置する。調査前の現況は栗山川流域遺跡群が水田、宝米遺跡は畑で、両遺跡の比高差は約 33 mであった。栗山川及び支流の高谷川流域に広がる低地部は､戦後の早い時期から丸木舟の出土が多く確認されている（第２図)。高谷川低地Ｂ地点では丸木舟出土地点近くで縄文時代後期土器と木杭が調査され、丸木舟の時期の分かる資料として特筆される。一方、栗山川中流域に位置する台地上では縄文時代の貝塚や縄文時代～平安時代の集落がみられ、比較的広い平坦面を有する台地には後期を主体とする古墳群が確認されている。栗山川に向かって半島状に突き出た台地先端や台地基部から離れた島状台地部では、中・近世にそれぞれの単位で城・砦が多く築かれる。近年、栗山川東岸域の遺跡は開発に伴い調査が実施され、調査成果があいついで公表されている。特に篠本城では中世城郭の大部分が調査され、全体像について明らかにされている。



第１図　栗山川流域遺跡群・宝米遺跡と周辺遺跡

第２図　迅速測図による周辺地形と丸木舟出土地



第３図　周辺地形と調査対象区

第２章　栗山川流域遺跡群

栗山川流域遺跡群の今回調査区は、宝米遺跡の北側に位置し、栗山川にかかる新井橋の北東側にある。調査にあたり丸木舟の出土や栗山川の旧河道の検出が予想されたため、現河道に沿ってやや密に確認トレンチを設定した。確認トレンチの面積は調査対象面積の約５％とした。その結果、縄文時代前期から後期の土器片や木製品が主に出土した。しかし、遺物が集中して出土する地点はなく、明確な遺構も平面的に確認することができなかったため、確認調査の範囲内で調査を終了した。

調査対象面積 63,872㎡　　上層確認調査 3,193㎡・本調査０㎡

第１節　トレンチ　（第４～６図、第１表、図版３～５）

確認トレンチは全部で１Ｔ～ 24 Ｔの 24 か所に設定した。基本的に各トレンチとも緑灰色泥炭層までは掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認した。調査時は湧水がひどく、トレンチの断面観察をしている間に壁が崩落してしまう状況もあり、掘削はほとんど重機に頼らざるを得なかった。各トレンチでほぼ共通して確認できる層位は第４図のとおりで、現河道に離れるほど緑灰色泥炭層（第５層）の検出面が高く、自然貝層はその直上に堆積するが、すべてのトレンチで確認されているわけではない。

確認トレンチ断面図で５か所（第１表）ある落ち込みについても残念ながら平面的に確認することはできていない。断面で確認できる溝状の落ち込みは、上部は現水田耕作土で撹乱されているものの総じて深さはなく、黒色土が堆積していることから、栗山川本体の旧河道とは考えられない。23 Ｔ・24 Ｔの断面全体に確認された砂層が細かく相互に堆積されている状況は位置的に考えて旧河道の可能性が高い。

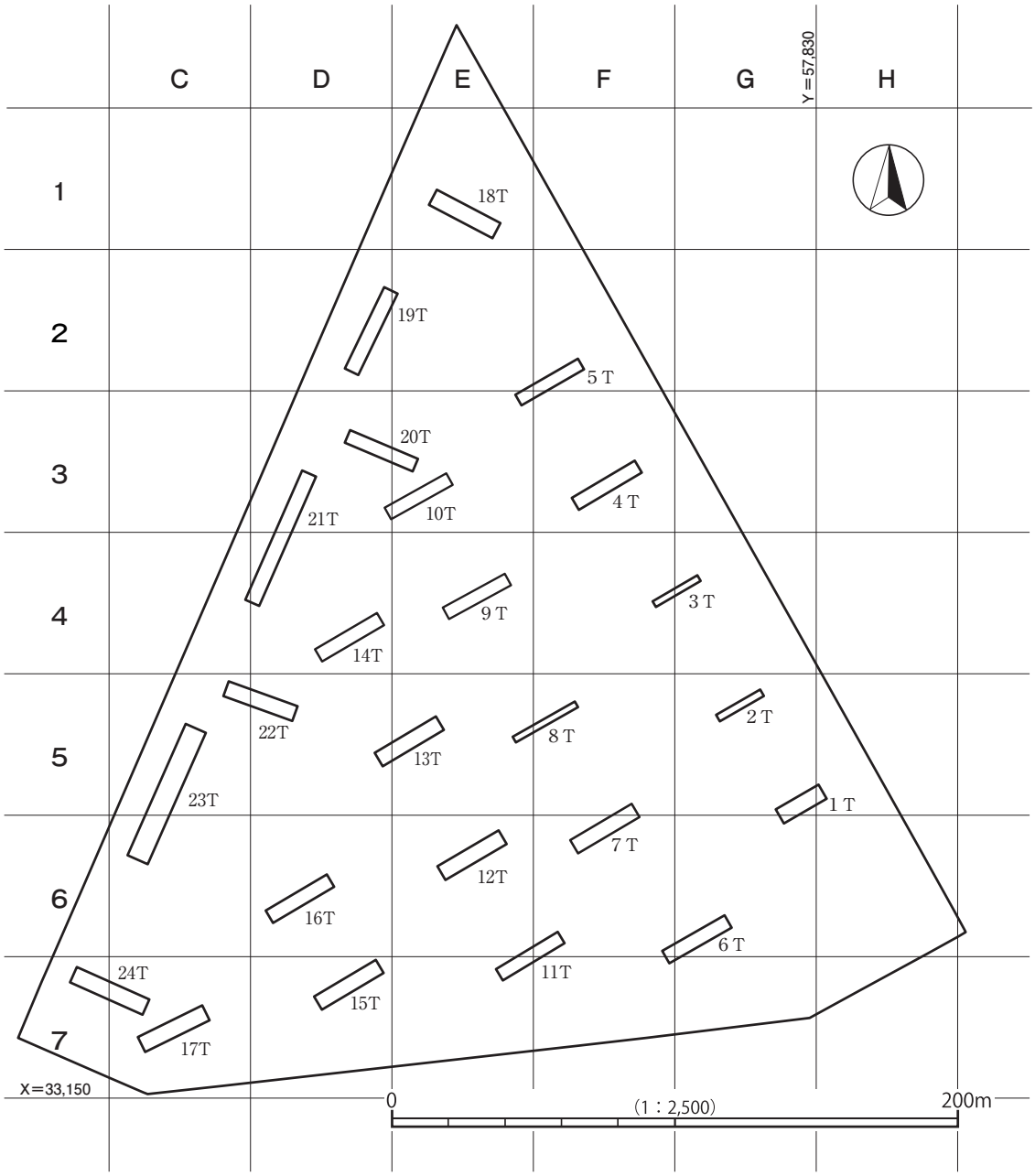
第２節　出土遺物　（第７・８図、図版６・７）

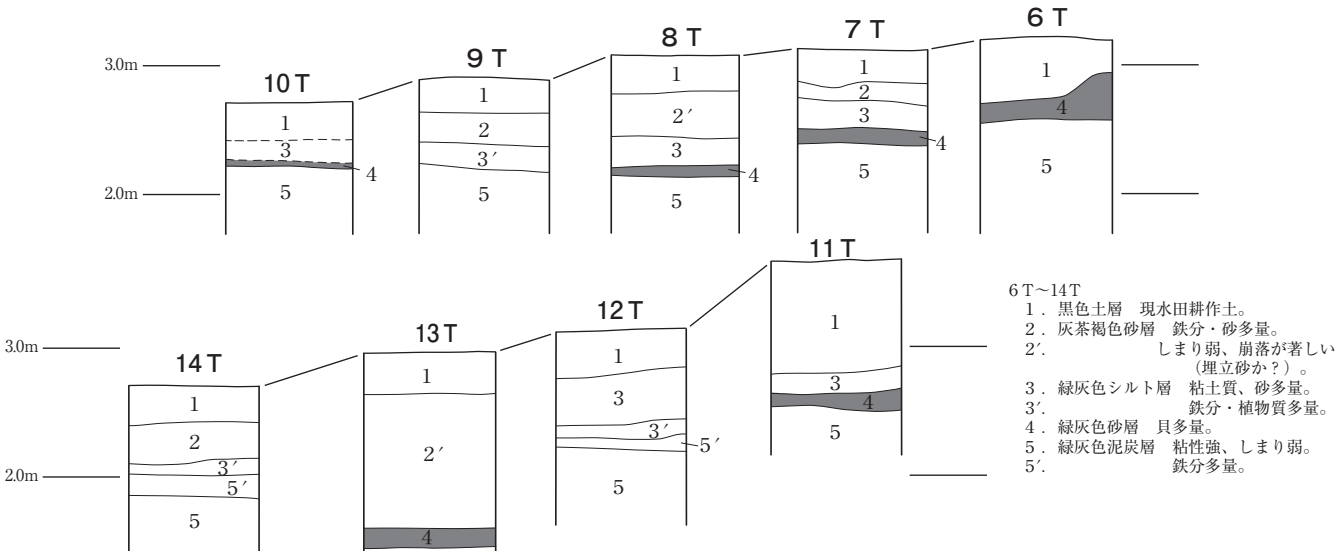
土器類　ほとんどが縄文土器で、土師器がわずかに含まれる。遺物の出土層位が判明しているものは９Ｔでの第２層、22T での第４層、24 Ｔでの第 19 層のみである。縄文土器は前期～後期にかけてのもので、前期が１点のみであった。ほとんどの土器片の器面は摩滅しており、色調は白みを帯びる。１は胎土に繊維を含む前期(黒浜式)の土器片である。２～ 17 は中期の土器片で阿玉台式から加曽利Ｅ式の時期である。中期の土器片は全般的に側面が摩滅しており、切り込みが判然とはしないが土器片錘として利用されたものが含まれている。確実に切り込みが確認できるのは 17 である。18 ～ 36 は後期の土器片で、堀之内式から加曽利Ｂ式に相当するものと考えられる。

37・38 は無文の土器で器壁が薄く、器面にはヘラケズリやナデ調整が確認できる。土師器の甕破片で、奈良時代以降の所産と考えられる。なお、土師器の出土は 16 Ｔに限定される。

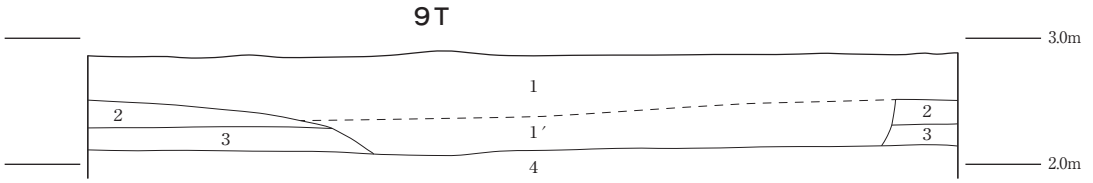
軽　石　軽石は４つのトレンチから出土した。色調はやや白みを帯びる。９Ｔの軽石は縄文中期の土器直下から出土した。39・40 は平らな面が部分的に確認でき、重量はそれぞれ 23.9 ｇ、139.7 ｇである。

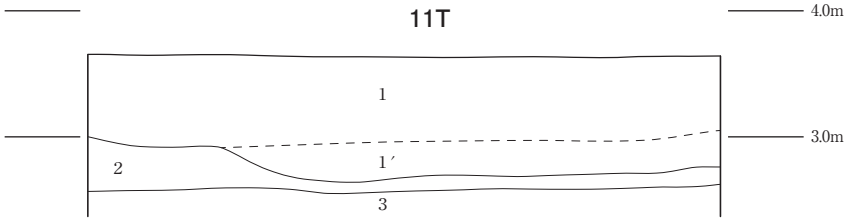
木製品　全て 24T からの出土である。全体的に遺存状況は不良で、面取りした加工痕がわずかに確認できる程度であり、種類を特定できるものは少ない。41・49 は平たく篦状に加工される。42・43 は棒状に面取りされ木杭と考えられる。45･47 は直立して出土しており、杭列として存在していた可能性が高い。





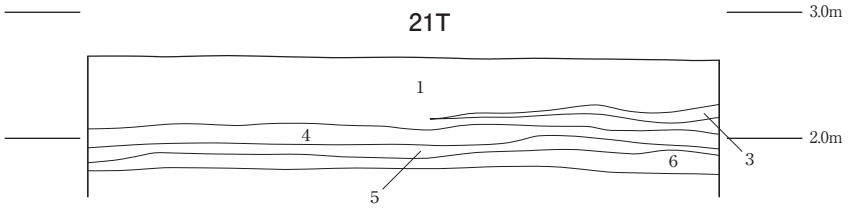
第４図　トレンチ配置図と土層柱状図



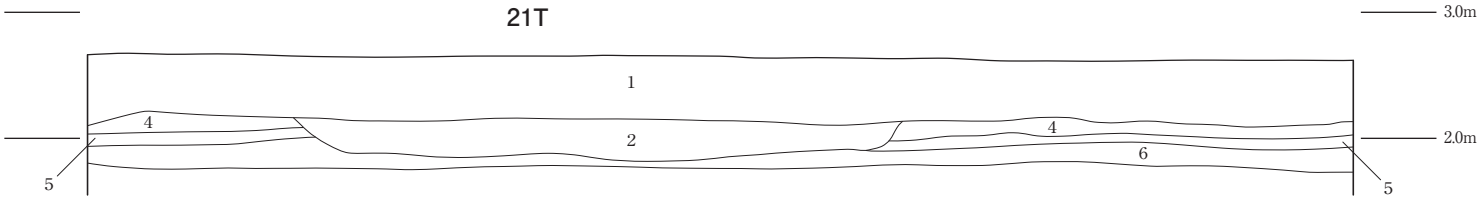


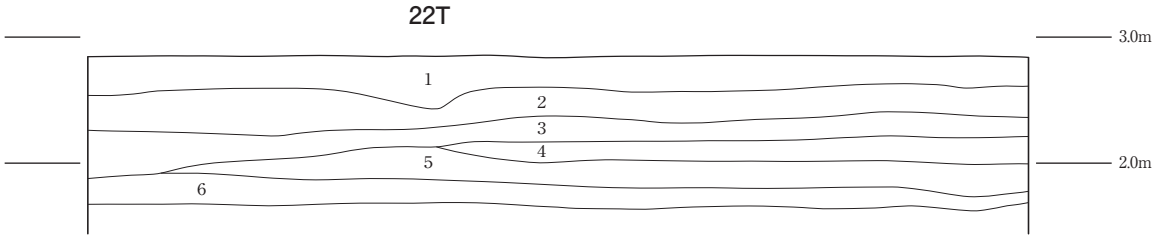
9T
1．黒色土層　現水田耕作土。
1′．　　旧河道部堆積土か？
2．灰褐色砂層　鉄分・植物質多量
（縄文時代後期土器出土層）。
3．茶褐色シルト層　鉄分・植物質多量。
4．緑灰色砂層　貝多量。

11T（西壁）
1．黒色土層　現水田耕作土。
1′．　　旧河道部堆積土か？
2．緑灰色シルト層　砂多量。
3．緑灰色砂層　貝多量。

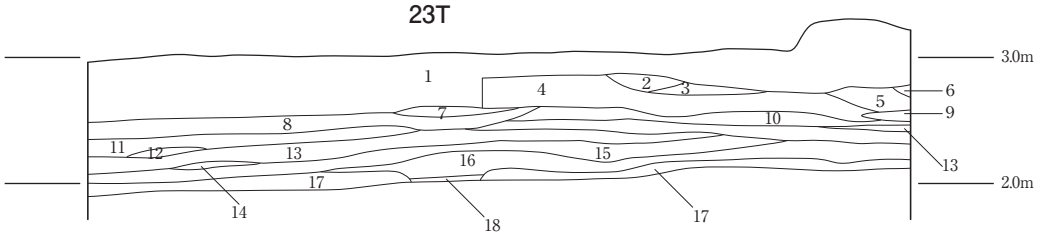


21T
1．黒色土層　現水田耕作土。
2．黒褐色土層　旧河道部堆積土か？
3．緑灰色シルト層　植物質多量。
4．灰白色砂層　鉄分多量。
5．灰茶褐色シルト層　鉄分多量。
6．緑灰色泥炭層　粘性強、しまり弱。



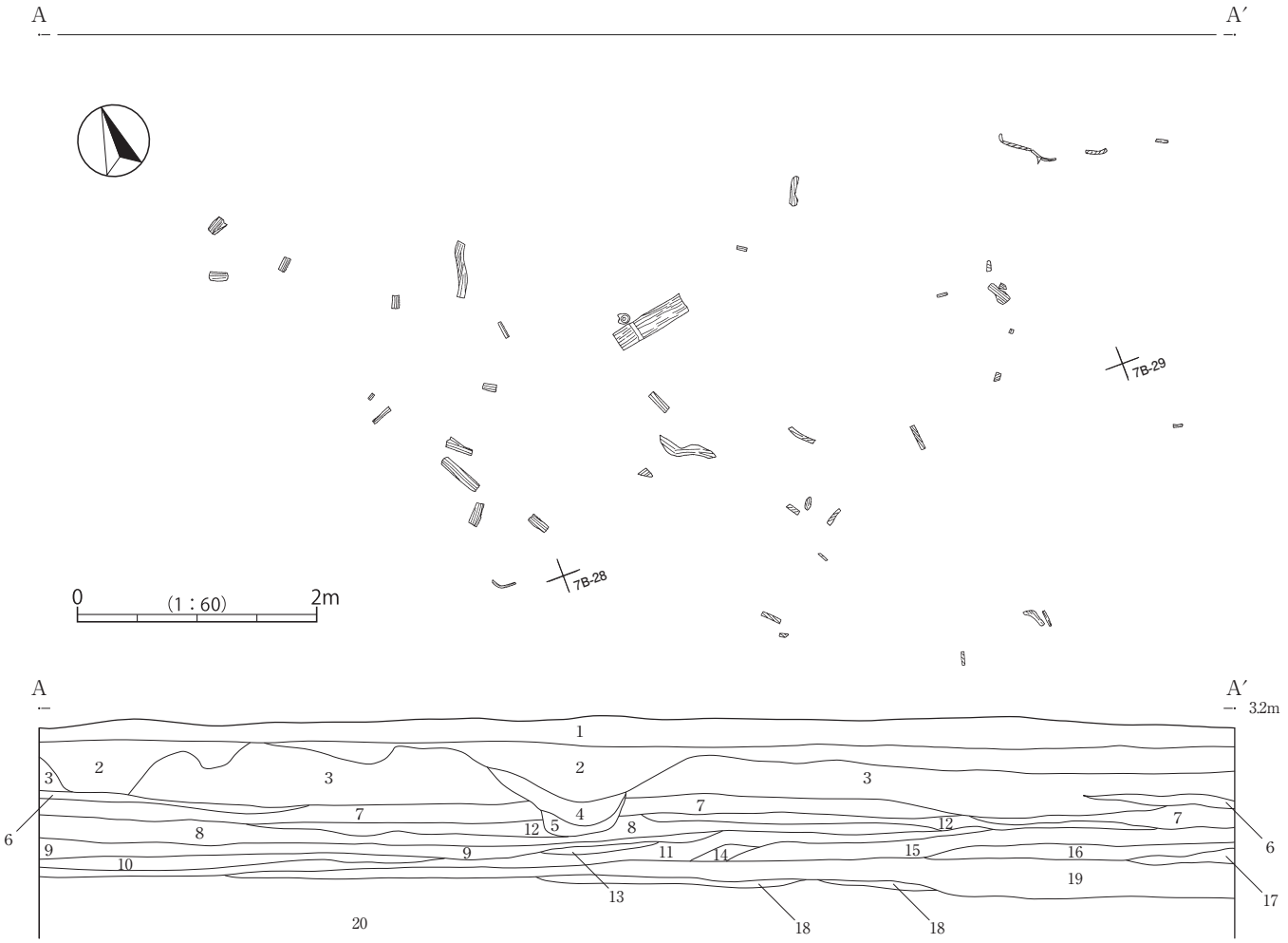


22T
1．黒色土層　現水田耕作土。
2．緑灰色シルト層　砂多量。
3．灰茶褐色砂層　鉄分多量。
4．暗茶褐色シルト層　鉄分・砂含。（縄文時代後期の包含層か？）
5．茶褐色砂層　貝多量。
6．緑灰色泥炭層　粘性強、しまり弱。



23T
1．黒色土層　現水田耕作土。
2．暗灰褐色土層　粘性強。
3．明褐色土層　砂質土。しまりあり。
4．暗褐色砂層　植物質・小石含。
5．黒色泥炭層　粘性強。
6．黄褐色砂層
7．茶褐色砂層　鉄分含。
8．暗茶褐色砂層　鉄分多量。
9．暗灰褐色砂層　植物質・鉄分多量。
10．明灰褐色砂層　小石・粘土粒含。
11．暗茶褐色砂層　鉄分多量。
12．明灰褐色砂層　粘土少量。
13．暗灰褐色砂礫層　粘土含。
14．明灰褐色砂層　粒子粗い砂層、粘土含。
15．暗灰褐色砂層　植物質・小石含。
16．暗黒灰色砂層　黒味を帯びた粒子の細かい砂層。
17．淡緑灰色泥炭層　貝多量。
18．濃緑灰色泥炭層　粘性強、しまり弱、貝なし。

第５図　主なトレンチ断面図

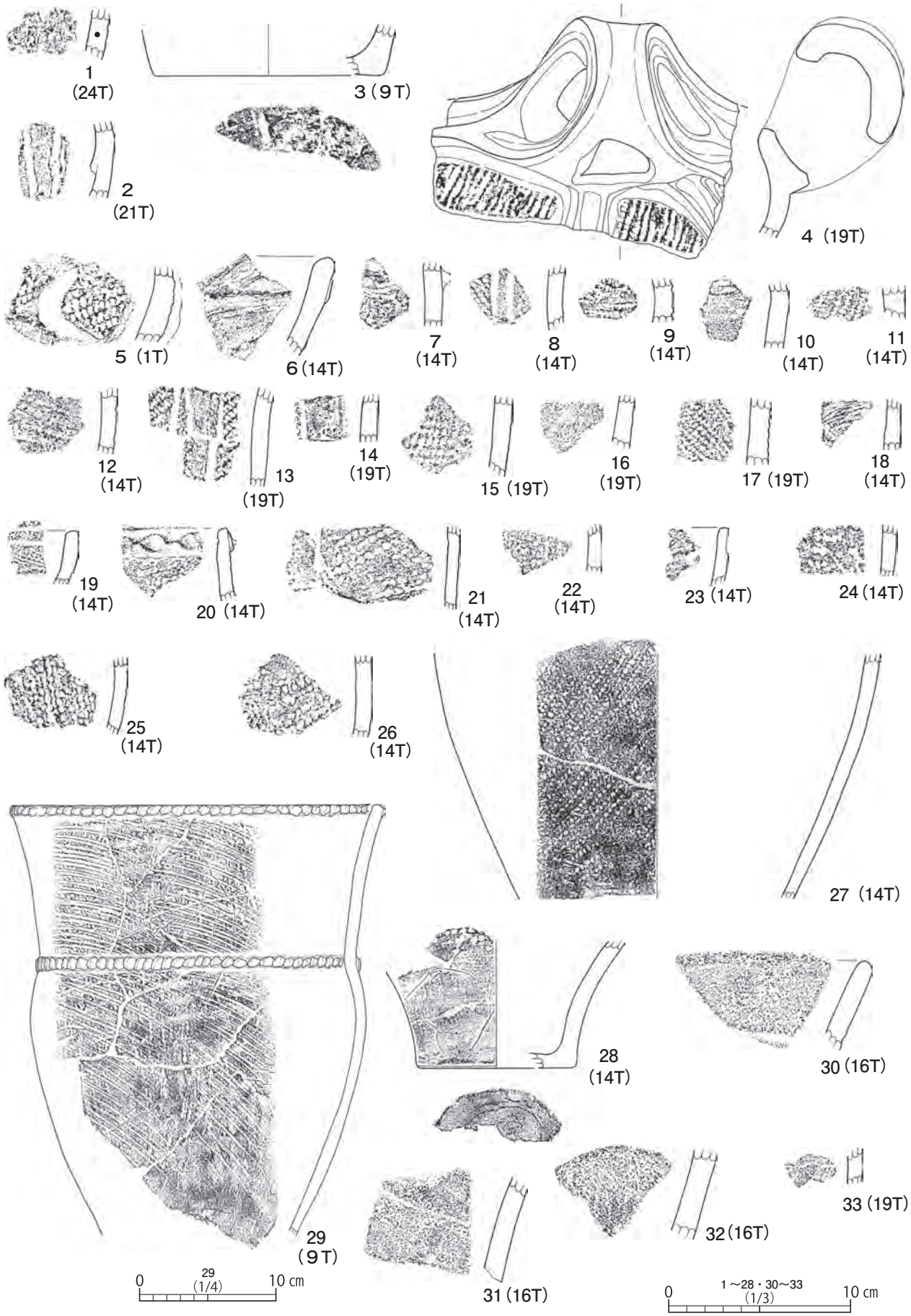


24T
1．黒色土層　現水田耕作土。
2．黒色泥炭層　旧河川堆積土か？
3．灰白色砂層
4．白色砂層
5．灰黒色砂層
6．暗灰色砂層
7．淡茶褐色砂層
8．暗灰色砂層　大粒砂礫含。
9．暗茶褐色砂層　大粒粘土塊・小石含。
10．明褐色砂層　粒子の細かい砂含。
11．黒褐色砂礫層
12．茶褐色砂層
13．明灰褐色砂層
14．灰白色砂層
15．茶褐色砂層
16．暗灰褐色砂層
17．茶褐色砂層
18．濃茶褐色砂層　しまり強、一部に貝層含。
19．暗灰色砂層　縄文土器・木杭・自然木包含層
20．緑色泥炭層

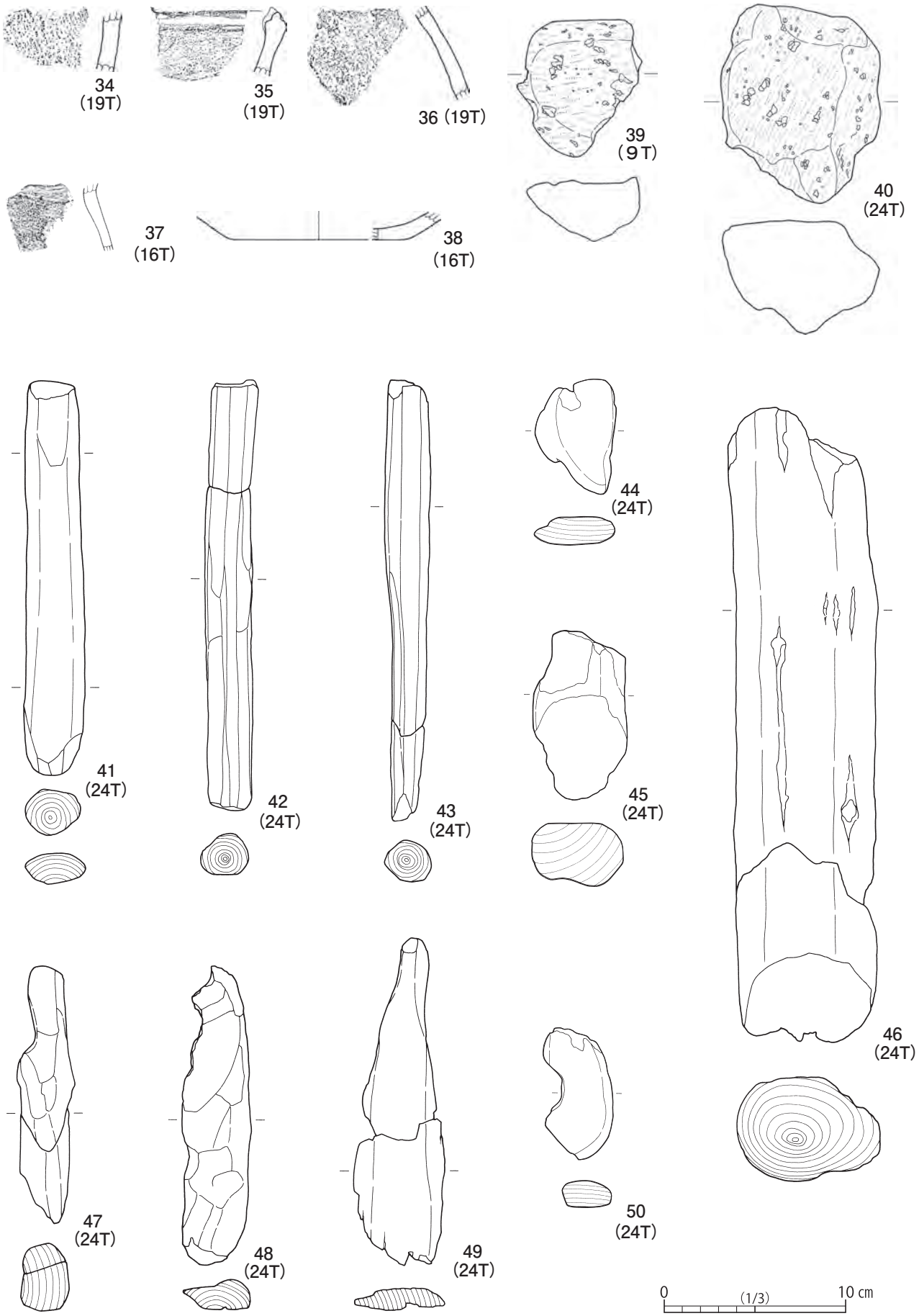
第６図　24 トレンチ遺物出土状況・断面図

第１表　確認トレンチ一覧表

トレンチ	面積（㎡）	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	出　土　遺　物	備　　考
1 T	83	20.0	4.2	1.0	縄文土器	
2 T	35	25.0	1.4	1.0	－	
3 T	35	25.0	1.4	1.0	－	
4 T	100	25.0	4.0	1.0	－	
5 T	100	25.0	4.0	1.0	－	
6 T	100	25.0	4.0	0.8	－	断面に落ち込みあり。
7 T	100	25.0	4.0	0.9	－	
8 T	50	25.0	2.0	1.0	－	
9 T	100	25.0	4.0	0.9	縄文土器・軽石	断面に落ち込みあり。
10 T	100	25.0	4.0	0.5	－	
11 T	100	25.0	4.0	1.1	－	断面に落ち込みあり。
12 T	130	32.5	4.0	1.0	－	
13 T	140	28.0	5.0	1.5	－	
14 T	150	25.0	6.0	1.4	縄文土器・軽石	
15 T	150	25.0	6.0	1.0	－	
16 T	150	25.0	6.0	1.0	縄文土器・土師器	
17 T	150	25.0	6.0	1.0	－	
18 T	150	25.0	6.0	1.0	－	
19 T	250	40.0	6.3	1.0	縄文土器	
20 T	150	25.0	6.0	1.0	－	
21 T	270	50.0	5.4	1.0	縄文土器	断面に落ち込みあり。
22 T	150	25.0	6.0	1.2	軽石	
23 T	300	50.0	6.0	1.2	－	砂層細かく堆積。
24 T	150	25.0	6.0	1.5	縄文土器・木製品・軽石	断面に落ち込みあり。砂層細かく堆積。


1 (24T)
2 (21T)
3 (9T)
4 (19T)
5 (1T)
6 (14T)
7 (14T)
8 (14T)
9 (14T)
10 (14T)
11 (14T)
12 (14T)
13 (19T)
14 (19T)
15 (19T)
16 (19T)
17 (19T)
18 (14T)
19 (14T)
20 (14T)
21 (14T)
22 (14T)
23 (14T)
24 (14T)
25 (14T)
26 (14T)
27 (14T)
28 (14T)
29 (9T)
30 (16T)
31 (16T)
32 (16T)
33 (19T)
0 29 (1/4) 10 cm
0 1～28・30～33 (1/3) 10 cm

第７図　遺物実測図（１）


34
(19T)
35
(19T)
36 (19T)
39
(9T)
40
(24T)
37
(16T)
38
(16T)
41
(24T)
42
(24T)
43
(24T)
44
(24T)
45
(24T)
46
(24T)
47
(24T)
48
(24T)
49
(24T)
50
(24T)
0
(1/3)
10 cm

第８図　遺物実測図（２）

第３章　宝米遺跡

宝米遺跡は前章の栗山川流域遺跡群調査区の南に位置する標高 36 ｍの台地上にあり、今回の調査区はその台地の北側縁辺部にあたる。上層確認調査では近現代の撹乱がひどく、時期の特定できる遺構は検出されず、本調査には至らなかった。下層確認調査では７か所設定した２ｍ×２ｍの確認グリッドの内１か所（第３グリッド）で旧石器が３点出土したため、確認グリッドの北東側を拡張して本調査を実施した。

調査対象面積 1,386㎡　　上層確認調査 177㎡・本調査０㎡　　下層確認調査 28㎡・本調査 25㎡

第１節　旧石器時代　（第９・10 図、第２表、図版８・９）

遺物分布　北に向かって突出した台地縁辺部から旧石器時代の石器集中地点が１か所検出された。平面分布は小規模であり、長径３ｍ、短径 2.5 ｍの楕円形を呈する。垂直分布は、出土層準は立川ロームⅨ層下部からⅩ層と捉えられ、遺物の出土レベル差は約 60cm とやや大きい。多くの石器がⅩ層上部に集中して出土していることから、この付近に本来の生活面があったものと推定される。このことは、石器群の内容とも整合する。

出土石器　出土石器は確認調査で出土した３点を含め、計 12 点である。内訳は台形様石器１点、楔形石器１点、剥片 10 点（両極剥片３点、剥片７点）となる。そのうち４点について実測した。

１は台形様石器である。平坦打面で先端部が内湾した横長剥片を素材としている。右側縁に急角度の二次加工が施されている。６は楔形石器である。剥片素材であり、被熱により表面が部分的に変色している。９は両極剥片である。左側縁に刃こぼれが部分的に観察される。11 は両極剥片である。斑晶が多い黒曜石製で、肉眼的には高原山産と推定される。

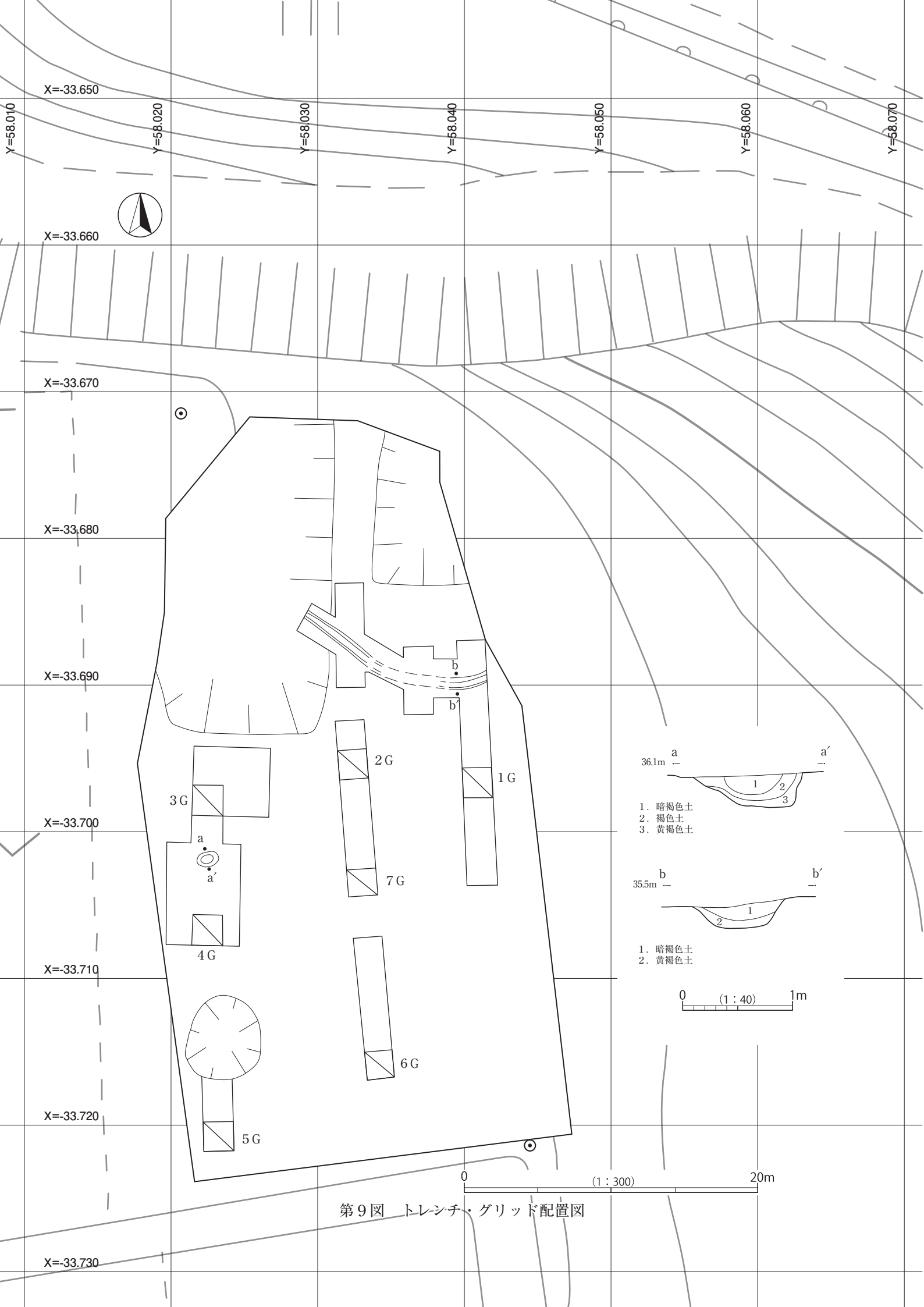
石器の製作技術に関しては、両極技法と横長剥片生産技術の共存が特徴的である。前者は、小型の原石を徹底的に使い尽くすことを目的として行使されている。この技法によって生じた両極剥片は側面形が直線的で上下両端が潰れている。これに対して、後者によって生産された横長剥片の形状は、平坦打面を有し先端部が内湾している。

石器石材　石器石材の内訳は玉髄 11 点、黒曜石（高原山産）１点であり、おおむね北関東系の石材といえる。玉髄は特徴に乏しいために、母岩別資料の識別は困難であった。なお、被熱石器が４点出土している。いずれも石材は玉髄であり、熱変成により、表面が黒みを帯び、中には破砕例もみられる。

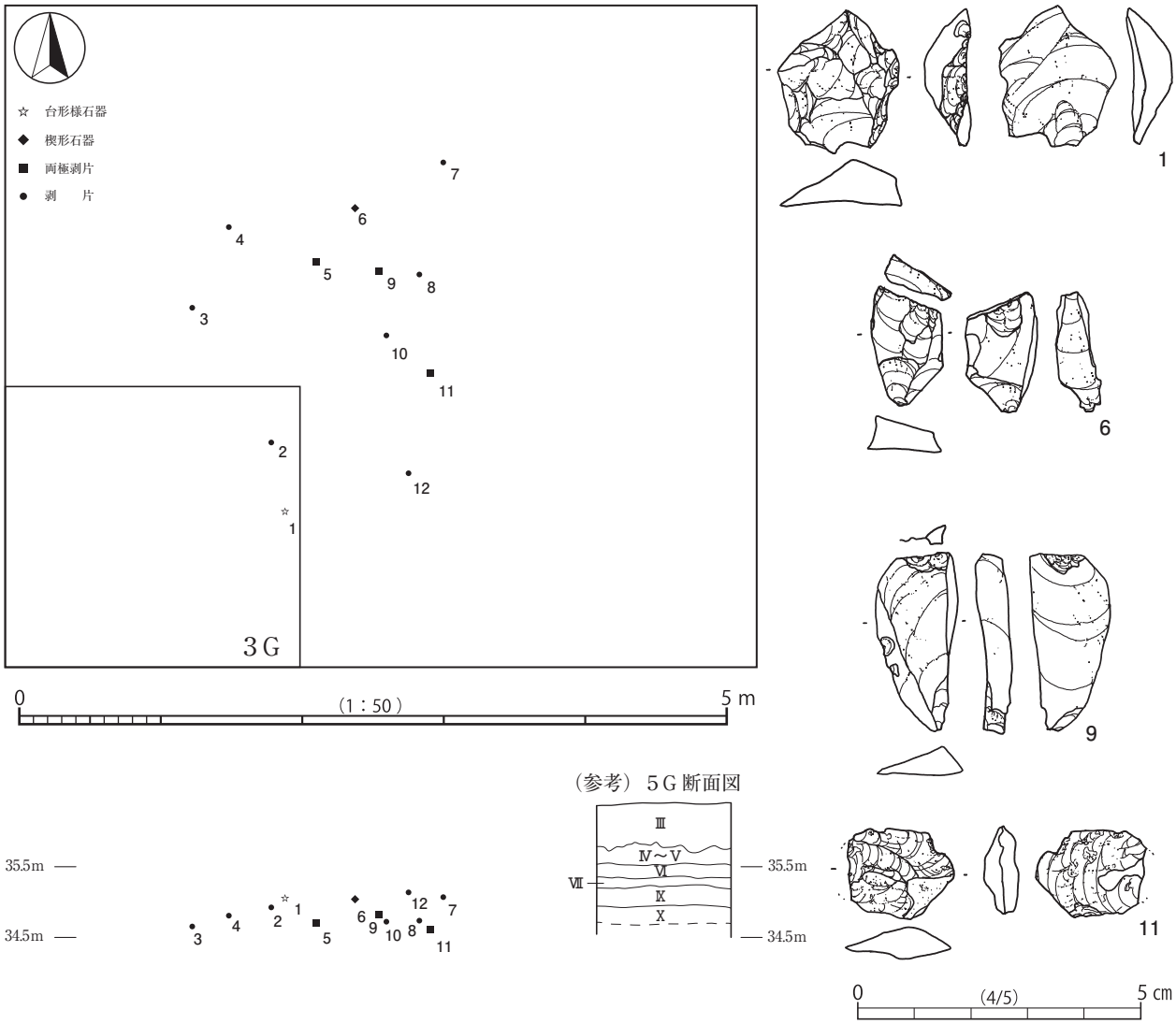
第２節　縄文時代以降　（第９図、図版８）

確認調査によって、確認トレンチ内から土坑１基（長軸 164cm・短軸 104cm・深 31cm）、溝状遺構１条（長 13 ｍ・深 20 ～ 30cm）が検出された。遺構の検出された確認トレンチを一部拡張し、遺構の精査をした結果、確実に伴う遺物は出土しなかった。覆土の特徴のみでは時期が特定できず、周辺にも関連遺構等の広がりが確認できなかったため、確認調査の範囲内で終了した。

上層の調査区内出土遺物は縄文土器の２cm 程度の破片と近代以降の土器片の２点のみである。縄文土器の器壁は薄く、胎土に雲母粒子が含まれる。時期は縄文時代中期の可能性があるが、判然としない。



第９図　トレンチ・グリッド配置図



第 10 図　旧石器出土状況・実測図

第 2 表　旧石器時代石器観察表

整理No.	グリッド	遺物No.	器　種	大きさ（cm・g）				石　　材	欠損状況	実測	備　　考
				長さ	幅	厚さ	重量				
1	3	1	台形様石器	2.4	2.1	1.6	3.2	玉髄	完形品	●	
2	3	2	剥片	1.3	1.4	0.5	0.7	玉髄	基部欠損		被熱により変質
3	3	4	剥片	1.9	2	0.7	2.4	玉髄	基部欠損		
4	3	5	剥片	1.3	1.7	0.5	1.3	玉髄	先端部欠損		
5	3	7	両極剥片	1.5	1.8	0.5	1.0	玉髄	下半部欠損		
6	3	8	楔形石器	1.9	1.7	0.7	2.1	玉髄	完形品	●	被熱により変質
7	3	9	剥片	1.3	1.7	0.4	1.0	玉髄	基部欠損		
8	3	11	剥片	2.1	1.9	0.6	2.2	玉髄	先端部欠損		
9	3	12	両極剥片	3.1	1.4	0.5	2.4	玉髄	完形品	●	刃こぼれ（左側縁）
10	3	13	剥片	2.2	1.5	0.3	0.7	玉髄	完形品		
11	3	14	両極剥片	1.9	1.6	0.5	1.4	（高原山産）黒曜石	ほぼ完形	●	ガジリ有
12	3	15	剥片	2.8	2.2	0.8	3.8	玉髄	完形品		被熱により変質

第4章　ま　と　め

今回の両総農業水利事業に伴う発掘調査は低地遺跡である栗山川流域遺跡群、台地上に展開する宝米遺跡をセットで実施した。残念ながら、両遺跡を有機的に結びつける成果はなかったが、それぞれの遺跡で貴重な知見を得ることができた。ここでは遺跡ごとに成果をまとめておく。

栗山川流域遺跡群は全国的に見ても丸木舟出土例の豊富な遺跡の中の一つである。今回の調査では、丸木舟の発見を第一義として確認調査が実施されたが、実際には検出することができなかった。遺物では少量ではあったが縄文時代中期から後期を主体とする土器片と木杭等が出土した。24T でまとまって出土した木杭には直立して検出されたものもあり、本来、木杭列をなしていた可能性が考えられる。杭の立てられた上面を特定することはできず、時期は特定できないが、同トレンチ出土土器や周辺域での調査成果[2)]から考えて縄文時代に遡る可能性がある。栗山川流域に半島状に突き出た台地上には縄文時代の貝塚や後晩期の集落が多く確認されており、当時の水上交通や行動域を考える上で興味深い成果といえる。

宝米遺跡の上層では近・現代の撹乱がひどく、時期を特定できない土坑と溝を検出したのみであった。本来の状況ならば古墳群[3)]や城跡に関連する遺構や遺物が検出される可能性が高かったが、残念ながら遺物量も極めて少量であった。下層の旧石器時代では、北側台地縁辺部から小規模な石器集中出土地点が１か所検出された。出土地点は台地の張り出し部にあたり、下総台地における遺跡立地の典型例といえる。石器群の時期は立川ロームＸ層上部に相当し、周辺地域では最古級の資料の一つである。石材は玉髄を主体とし、一部の剝片に被熱・変色したものがあり火処との関連が指摘できる。石器製作技術の特徴として両極技法と横長剝片生産技術の共存が挙げられる。当出土地点についてはやや零細な資料のため詳細は不明とせざるを得ないが、剝片生産を基調とした場の利用が想定できる。

注１）周辺の遺跡は以下の文献を参照した。

1963「千葉県山武郡高谷川遺跡Ｂ地点」『日本考古学年報』６ 日本考古学協会

1968「千葉県山武郡高谷川遺蹟（第２次）」・「同 牛熊貝塚」『日本考古学年報』７　日本考古学協会

2000『千葉県匝瑳郡光町夏台遺跡』東総文化財センター発掘調査報告 20

2000『千葉県匝瑳郡光町篠本城跡・城山遺跡』東総文化財センター発掘調査報告 21

2002『千葉県匝瑳郡光町神山谷遺跡（１）・（２）』東総文化財センター発掘調査報告 25・26

2005『千葉県匝瑳郡光町芝崎遺跡１』東総文化財センター発掘調査報告 30

2006『千葉県匝瑳郡光町傍示戸遺跡』東総文化財センター発掘調査報告 32

2006『千葉県匝瑳郡光町芝崎遺跡群』東総文化財センター発掘調査報告 33

２）栗山川流域遺跡群では下記の調査成果が挙げられている。

1996『多古町栗山川流域遺跡群』多古町教育委員会

1997『多古町栗山川流域遺跡群・島八幡下遺跡』多古町教育委員会

1999『栗山川流域遺跡群 島ノ間遺跡』香取郡市文化財センター調査報告 60

３）1967 杉山晋作「宝米六号墳石室調査報告」『金鈴』20 号 早稲田大学考古学研究会

写　真　図　版

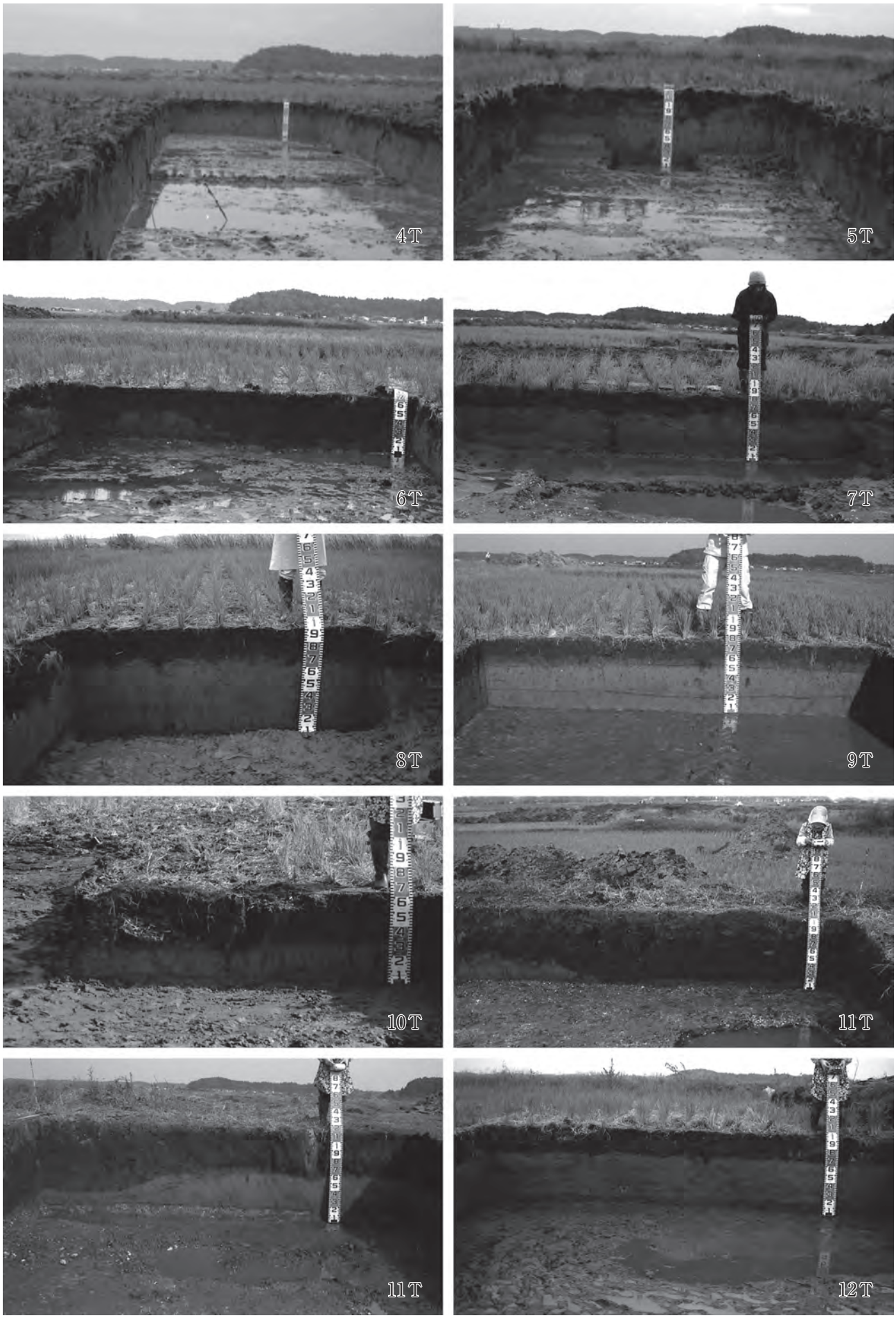
図版 1

航空写真（1/10,000）

図版 2

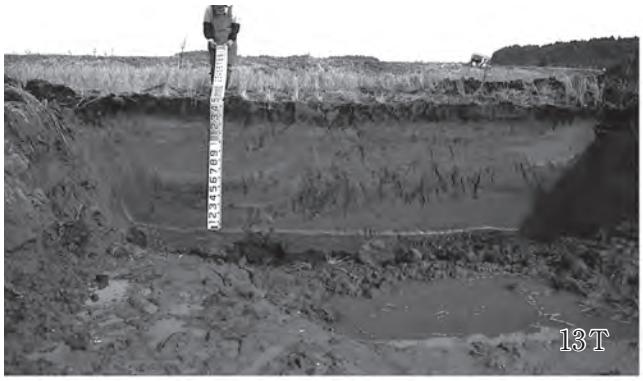
栗山川流域遺跡群

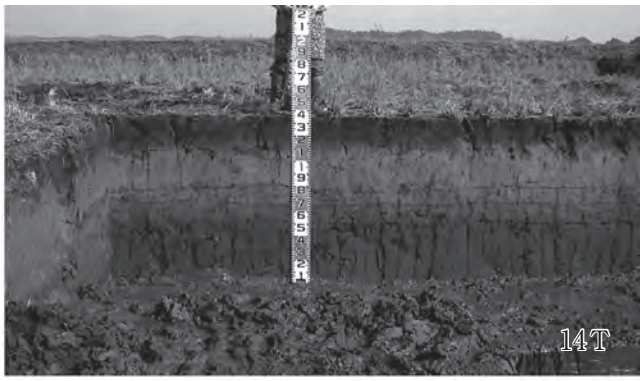
調査区遠景

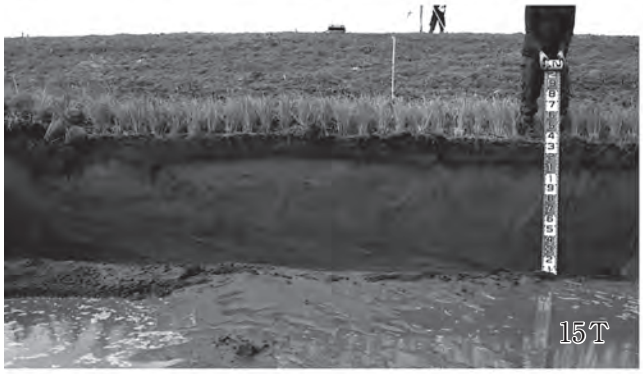


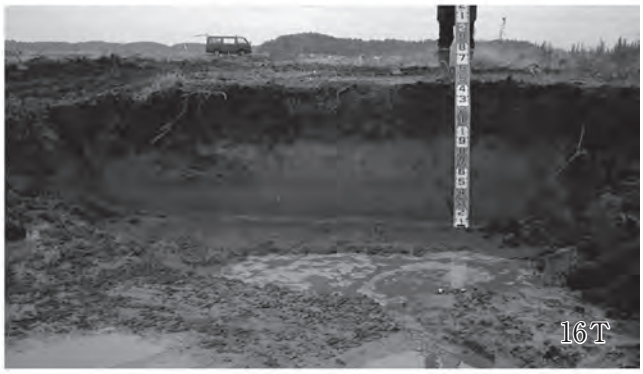
トレンチ土層状況（1）

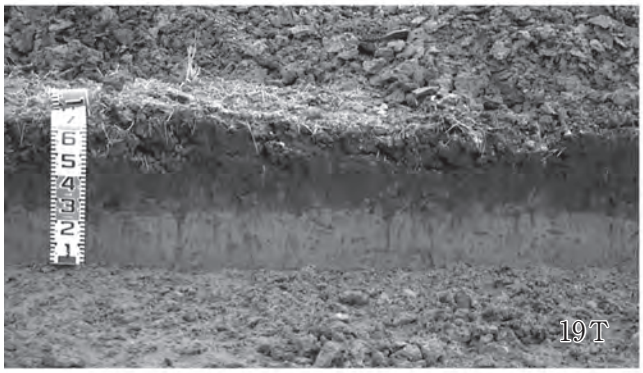
栗山川流域遺跡群

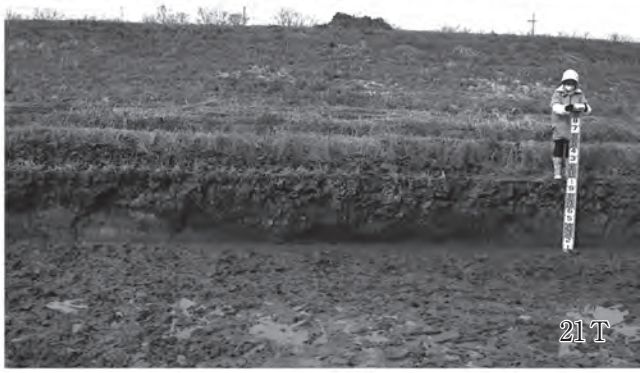


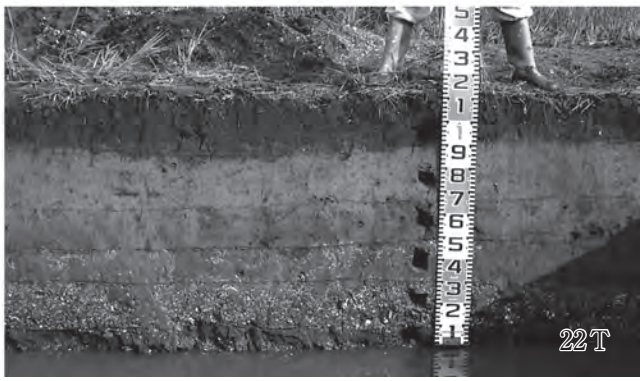






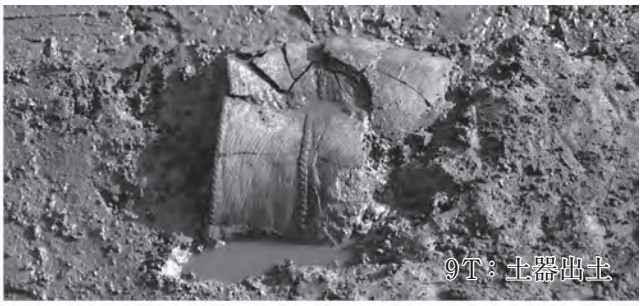






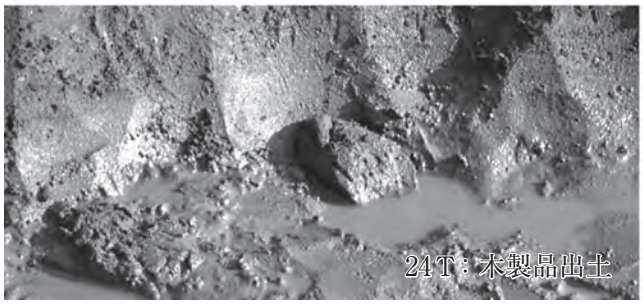
トレンチ土層状況（2）

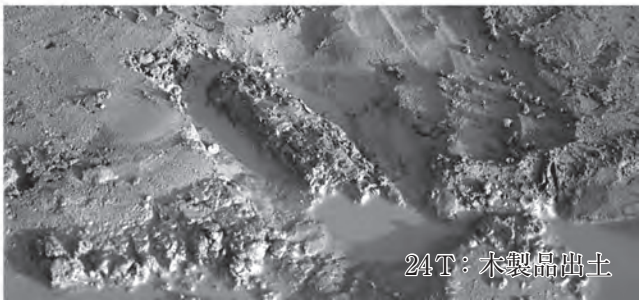
23T


9T：土器出土

24T：遺物出土状況（南から）

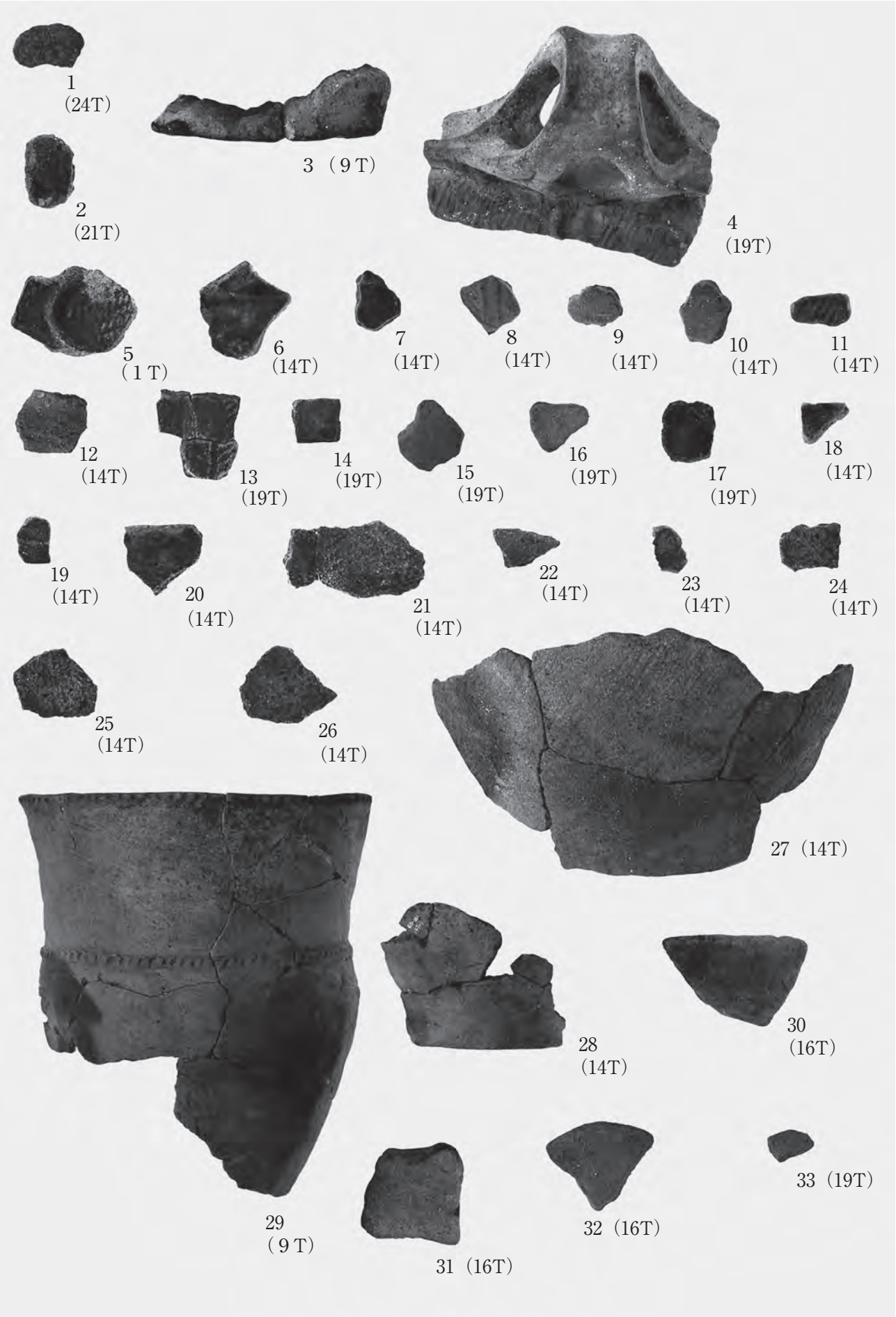
24T：断面（南西から）


24T：木製品出土

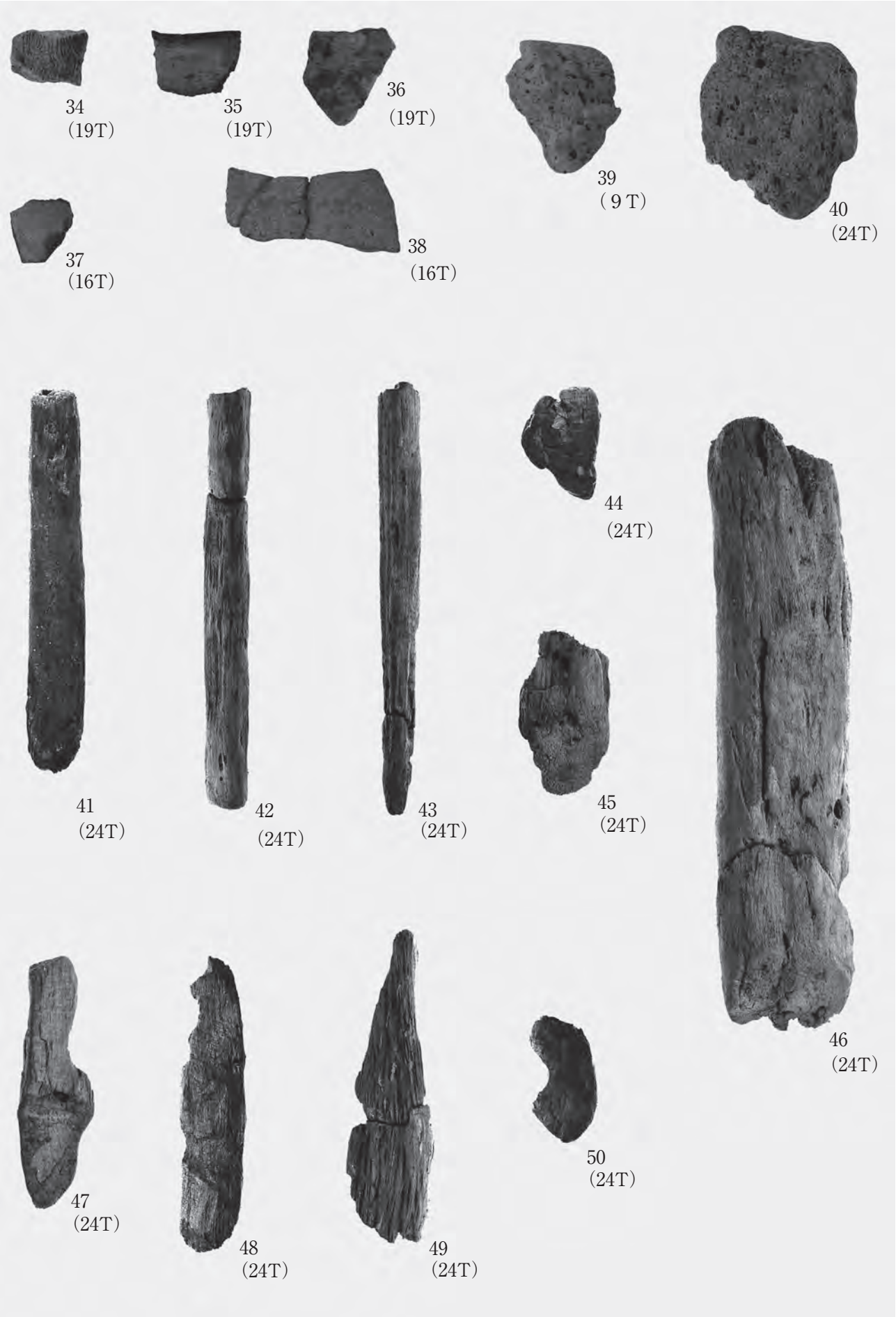

24T：木製品出土

図版５　トレンチ土層状況（３）・遺物出土状況

栗山川流域遺跡群



出土遺物（1）


34
(19T)
35
(19T)
36
(19T)
39
(9T)
40
(24T)
37
(16T)
38
(16T)
41
(24T)
42
(24T)
43
(24T)
44
(24T)
45
(24T)
46
(24T)
47
(24T)
48
(24T)
49
(24T)
50
(24T)

出土遺物（2）

宝米遺跡

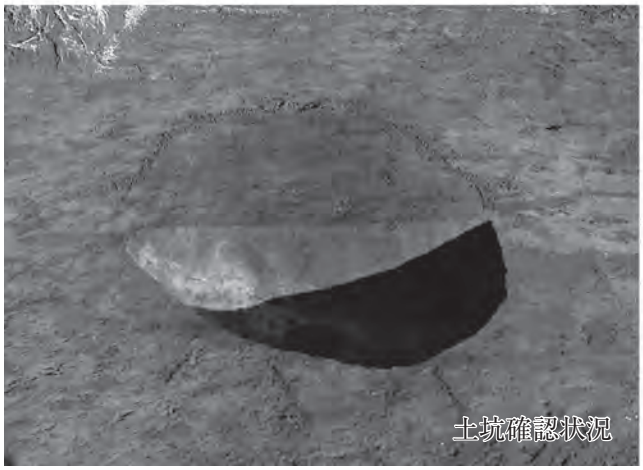
調査後遠景（北：栗山川流域遺跡群から）

調査前

確認トレンチ

下層断面

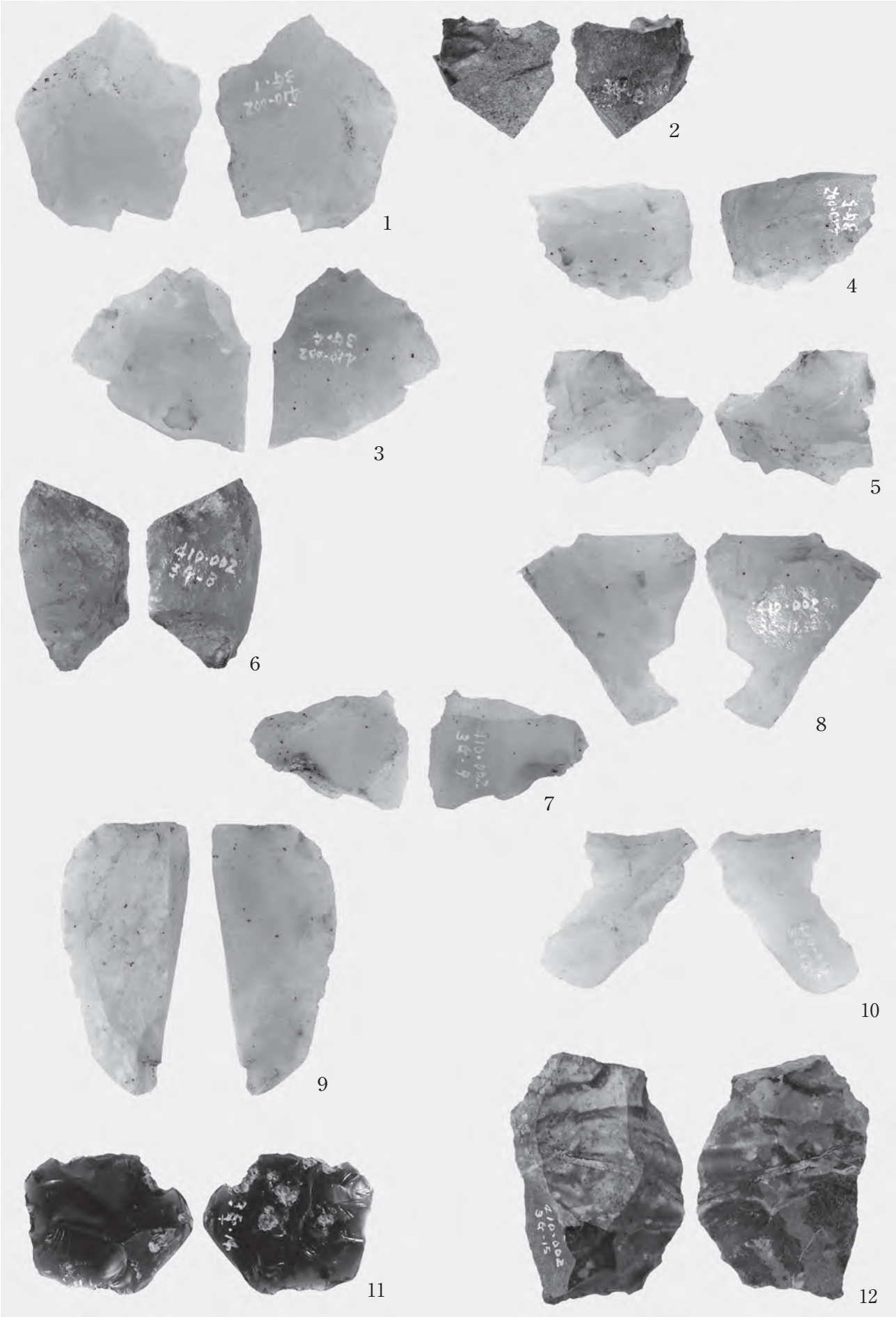
第３グリッド：旧石器出土状況


土坑確認状況

溝確認状況

遺構・石器出土状況

宝米遺跡



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	よこしばひかりまち　くりやまがわりゅういきいせきぐん・ほうめいせき
書名	横芝光町　栗山川流域遺跡群・宝米遺跡
副書名	両総農業水利事業　栗山川統合機場等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第715集
編著者名	黒沢 崇
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　　TEL043-424-4848
発行年月日	西暦2013年3月15日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
栗山川流域遺跡群（くりやまがわりゅういきいせきぐん）	山武郡横芝光町（さんぶぐんよこしばひかりまち）新井字六反町（あらいあざろくたんまち）887番地ほか	12410	001	35度42分1秒	140度28分14秒	20091001～20091130	63,872㎡	両総農業水利事業栗山川統合機場等建設工事
宝米遺跡（ほうめいせき）	山武郡横芝光町（さんぶぐんよこしばひかりまち）新井字申畑（あらいあざさるはた）945番地ほか	12410	002	35度41分52秒	140度28分17秒	20100201～20100222	1,386㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栗山川流域遺跡群	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器・木製品	
宝米遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中出土地点1	旧石器	小規模であるが周辺地域では最古級の旧石器が出土した。

要約	栗山川流域遺跡群では丸木舟の出土を想定し確認調査が実施されたが、実際には検出することができなかった。遺物では少量ではあるが縄文時代中期から後期を主体とする土器と木杭等が出土した。1か所にまとまって出土した木製品は本来、木杭列をなしていたものと考えられ、時期は縄文時代に遡る可能性がある。 宝米遺跡の上層では撹乱がひどく、時期を特定できない土坑と溝を検出したのみで、遺物量も極めて少量であった。下層の旧石器時代では、小規模な石器集中出土地点が1か所検出された。石器群の時期は立川ロームX層上部に相当し、周辺地域では最古級の資料の一つである。石材は玉髄を主体とし、石器製作技術の特徴として両極技法と横長剥片生産技術の共存が挙げられる。

千葉県教育振興財団調査報告第 715 集

横芝光町 栗山川流域遺跡群・宝米遺跡

―両総農業水利事業　栗山川統合機場等建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―

平成 25 年 3 月 15 日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　関東農政局　両総農業水利事業所
東金市松之郷 2333

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印　刷　三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町 1397